

MOVIN

高岡デザイン情報誌【ムーヴィン】

[特集]

Takaoka Design Movement ③

デザイン教育と 地域産業との関わり in 高岡

[技・ヒト・モノづくりの情景／原型師]

[私のグッドなプロダクト] 杉本貴志

[私と高岡クラフトコンペ] 下尾和彦

街角デザインフォーカス

「立野シルバーハウス(高岡市営住宅)」は、民間の福祉施設と一体となった北陸初の高齢者複合施設で、1・2階部分の特別養護老人ホーム「香野苑」と3・4階部分の高齢者を対象としたシルバーハウス(市営住宅)からなっている。集合住宅としてのシルバーハウスは、雁行型の建物配置と瓦屋根からなるファサードの表情が、戸建住宅を連想させるなど、独立性の高さを求めている。一方、緊急時における階下の福祉施設内・デイサービスセンターとの通報システム、また室内外のバリアフリー対応など、高齢者の安心と安全をカタチにした機能を備える。オフホワイトが印象的な隣接する一般市営住宅とあわせて、街の新しいランドマークになっている。

※表紙写真：立野シルバーハウス(高岡市営住宅)

高岡デザイン情報誌【ムーヴィン】

VOL.8 1999年3月31日発行

写真提供・取材協力

相川繁隆
株式会社老子製作所
株式会社オリジン
金森新東株式会社
特別養護老人ホーム 香野苑
黒川雅之
下尾和彦
杉本貴志(株式会社スーパーポト)
高岡クラフトショップ・フォルム
高岡市教育委員会体育保健課
高岡市建築指導課
高岡市建築住宅課
高岡市工芸デザイン指導所
財団法人 高岡市民文化振興事業団
高岡漆器株式会社
高岡漆器青年会
高岡市美術館
高岡商工会議所
国立高岡短期大学
株式会社高田製作所
有限会社タカタデザインラボ
株式会社タカタレムノス
株式会社竹中製作所
立山アルミニウム工業株式会社
額田家
田嶋吉徳
玉井昌夫
株式会社中条・有限会社カムイ
伝統工芸高岡漆器協同組合
富山インダストリアル デザインセンター
富山県高工労働部商工企画課
社団法人富山県デザイン協会
富山県立高岡工芸高等学校
「とやまのクラフト展in静岡」実行委員会
株式会社ニュース・インターナショナル
橋本利久
伏木北前船資料館
HOMUBO INC.
有限会社武蔵川工房
守 弘勝
株式会社山口久典 (50音順・敬称略)

STAFF

Published by 高岡市中小企業課
〒933-8601 富山県高岡市広小路7-50 TEL.(0766)20-1285
Executive Editor MASAYOSHI KIMURA
Art Director HIDEAKI SOUMA
Designer YUKIKO AZUMA
TAKAKO NISHIKAWA
AYANO IMADA
Writer SATOSHI KITAYAMA
AZUSA HASE
RIE MORINAGA
MAHIRO YOSHIZAKI
Photographer YUICHI ISHIHARA
TOMOAKI KANATANI
EIJI HONBO
Printed by 相互企画印刷株式会社

MOVIN<ムーヴィン>は、MOVINGの略形で、「動く」「進展する」「感動させる」という意味を持ちます。

デザイン情報誌「MOVIN」は、高岡の街や人、企業そして行政の動きを「デザイン」というアンテナでキャッチ、ユニークな切り口でご紹介します。

また、MOVINは高岡独自のデザインパワーを市内外に発信していくとともに、高岡の未来に向けて「新しいデザインの動き」を生み出していく情報誌を目指しています。



1999 VOL. 8



国立高岡短期大学

高岡とその周辺地域の地場産業の育成を目的に昭和58年(1983年)、開学。2年制の学科と学科卒業後に進学できる2年制の専攻科で構成されている。なかでも産業デザイン学科は、金属工芸、漆工芸、木材工芸、産業デザインの4専攻を置き、伝統工芸を継承し地場産業における技術の向上に貢献する人材育成を図っている。その成果は、全国の公募展における在学生、卒業生の功績からも見てとれ、ことに高岡98クラブコンペでは、グランプリ、奨励賞、ほか多数の入賞、入選を果たした。

共同授業で学生が制作した時計



小松氏は、共同授業の参加学生に勧めていることが幾つかあるという。まず、ユーザーが何を求めているかを考えること。斬新なアイデアよりも使われているかを重視するという姿勢である。もう一つは、企業とのコミュニケーションを密にし、コストなどを考慮した制作プロセスを学ぶことである。「今までの教育は、学生の感性を伸ばして美しく表現することを重視してきました。しかし、本来デザインとは、現実の生活や企業のビジネスと密接に関係するものなのです。だから学生には、もっとデザインと社会との関わりを教えていかなければならない。こうした授業はそのための訓練であって、審美性だけを求めているではありません(小松氏)今年二月に開催された卒業制作・修了制作展では、先の考え方を実践した学生もいた。

実社会とのつながりをテーマに「美容室のワゴン」を制作した磯部主司(専攻科産業造形専攻二年)さんはその一人。美容室から制作の依頼を受け、ユーザーとの話し合いの中からデザインを決定して

の卒業生が活躍していることは、たいへん名誉なことだ」と語る同高校の八十田正俊校長は、伝統工芸を今に生かす工芸教育に尽力を注ぎ、地域の匠の技との連携を図っている。それは、伝統工芸にとどまらず、地場産業を意識した授業へと広がりをみせている。

最近の授業では、デザイン科の環境コースで行われた高岡市の街並みの再考がある。その中で、三年生の坂本洋子さんを含む八名は「瑞龍寺周辺の環境デザイン」に取り組んだ。瑞龍寺に着目したのは、国宝に指定されたこと、周辺はもともと魅力的なゾーンになると感じたからだ。リサーチを重ねた結果、テーマは子供からお年寄りまで幅広い年齢層の人々が集う街づくりに設定。

このプランでは、瑞龍寺を出てすぐ資料館があり、店が軒を連ねる通称「おみやげ屋さん通り」が見えてくる。通り沿いには茶店や公園を設置するなど、心が安らぐ空間を演出している。建築物は、瑞龍寺との調和を意識し、すべてシックにデザイン

されている。「アイデアのキャッチボールをしながら発想がふくらんでいく、その瞬間が一番盛り上がるんです。意見をまとめるのは大変でしたが、面白みは増したのかもしれない(坂本さん)。

「この授業の一番の特長はグループワークを取り入れたことです。制作の過程でデザイナーはチームの一員として役割を担います。だから、自分の考えを論理的にまとめ、人に伝える力がなければ仕事を進められない。それに、デザインとは社会に貢献するためにあるものです。それをきちんと理解して、人間関係がうまくできるようならならない。デザイン教育は同時に、人間教育でもあると考えます」と説明するのは、同高校のデザイン科長の吉川信一氏。人と人が刺激し合い、情報をやり取りすることがモノを生み出すという大切な要素に目を向けたと言えよう。



一般美容室向けワゴン
県内の美容室のリサーチ結果をもとに制作した作品。同時に複数のスタッフが使用できるように、引き出しは前後2方向から引き出すことができる仕組みになっている。

磯部主司さんの修了制作「美容室のワゴン」
注文制作による作品。美しく収納できるように、引き出しの奥行き寸法を道具類に合わせて設定している。

実社会との連携の中で考えるモノづくり

高岡の、もう一つのデザイン・工芸系の教育機関である高岡短期大学は、今年で開学十六年目を迎える日本では珍しい国立の短期大学だ。「高岡地方の歴史と現状を反映する意欲的な教育研究体制にこそ、真の魅力がある」と語る同短大の嶺山昌一学長は、常に新しい時代のニーズに速やかに対応し、時には社会に先駆けて時代をリードする、柔らかに開かれた教育研究組織づくりを目指す。

そのなかで、小松研治(同短大助教)氏は、実社会との連携の中で考える工芸品制作、という従来のとはまったく異なった教育に取り組んできた。たとえば、幼稚園へ行って園児の動作を観察する中で五歳児向けの椅子づくりを考えたり、同じ作品を複数制作することで材料費や人件費、量産型の制作方法を考えたりする。

昨年五月には、地元企業のタカタレムス(時計メーカー)との共同授業を行った。課題は、「金属、漆、木材を効果的に使った時計の制作」。その内容はこうだ。まず、タカタレムスの企画担当者が、学内で時計の基本的な構造についてのレクチャーを行う。参考商品が見たい学生は、各自で同社ショールームを訪問。希望すれば、その場で技術的な質問やデザインに関する相談もできる。作品が完成した時点で再び同社の企画担当者を招き、学内で講評会が行われる。

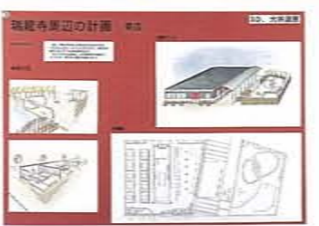
「工芸高校」と名のつく高校は、全国に五つしかない。なかでも明治二十七年に誕生した高岡工芸高校は、百六十年という最古の歴史を持つ。全国に先駆けて高岡に工芸高校が誕生した背景として、銅器、漆器などの伝統工芸が古くから発達していたことがあげられる。初代校長には、日本の工芸教育の大先覚である納富介次郎氏を迎えている。歴代校長をはじめ、教職員には美術工芸家を配し、これまでに数多くの優れた人材を芸術、工芸、産業界に輩出してきた。

「学校は地域があつてこそ成り立つ。地域で多く



富山県立高岡工芸高等学校

明治27年(1893年)、木材彫刻、金属彫刻、鋳銅、髹漆の4学科を持つ富山県立工芸学校として開校。以来、幾多の変遷を経ながら現在は、機械、電子機械、電気、化学工業、建築、工芸、デザインの7学科で構成されている。卒業生であり、また校長(5代目)を務めた国井喜太郎氏は、日本の産業デザイン界の大家。今日の産業デザイン隆盛の基盤をつくり、現在のデザイン界に多くの人材を送り出す役目を果たした。その所信を受け継ぎ、プロダクトデザイン及び工芸に関して優れた業績をあげた人々を顕彰するため、昭和48年に「国井喜太郎産業工芸賞」(工芸財団主催)が制定され、毎年、顕彰事業が行われている。



瑞龍寺周辺の環境デザイン
「おみやげもの屋八丁」(茶店)の説明パネル
テーブル座と小上がりの試食コーナーを設けたみやげもの屋。観光客に高岡の特産物の魅力をいかにアピールするかを採った作品。

デザイン教育と地域産業との

Takaoka Design Movement

関わり in 高岡



瑞龍寺周辺の環境デザイン「おみやげもの屋八丁」の縮尺模型

高岡には、デザイン・工芸系の高校と大学がある。一つは創立106年の伝統を誇る高岡工芸高校。そして、もう一つは開学16年目を迎える高岡短期大学。両校は歴史の差こそあれ、創立時から、ともに銅器、漆器、木工、アルミなど、高岡やその周辺の地場産業と強い関わりを持つ。地域の産業とデザインとの関係が深まっていくなか、学校におけるデザイン教育に、新しいムーブメントが生まれている。

いくことに重きをおいている。美容師の要望を聞き、その動きや道具類を観察したほか、県内の美容室を何店も見学、具体的なイメージをつかんだ後、制作に取りかかった。

「今回は、あくまでも注文制作ですから、作品ではなく商品を作ることが求められます。それには、お客様の要望はもちろん、コスト意識も必要になると思う。でも実際には、自分の手で作りたいという気持ちの方が勝つてしまい、時間もコストもかかり過ぎる結果となりました。家具店での売れ筋は、安くていいモノ。今回のように手の込んだ作業をしていては、太刀打ちできないですよ」と磯部さん。その反省に立って、現在、量産やコストまでも考慮したワゴンの制作を計画中だ。

「デザインの力で、地域に貢献」

両校の卒業生が地元根つき、産業のさまざまな分野で活躍している例は多い。高岡市で広告デザイン会社を経営する玉井品夫氏もそうである。高岡工芸高校デザイン科の卒業生で、現在は同校の教育振興会のメンバーの一員としてデザイン教育をサポート。今年二月に実施された「各学科優秀作品発表会」では、地元企業の代表の一人としてアイデア、デザイン、プレゼンテーションの方法などを全校生徒の前で評価した。「プロの視点から斬新な指導を受けることは、学生にとって良い刺激になるはず。産学の連携を図る意味でも重要なことだ」と玉井氏。

また、玉井氏は高岡市の文化振興活動にも積極的だ。なかでも、高岡野外音楽劇「越中万葉夢幻譚」は、氏を座長とし、デザイナーを中心とするグループによって企画された。高岡初の市民参加型イベント、万葉によるイメージ統一など、デザイナーの力なくして、この企画は生まれなかった。ポスターやパンフレットはもちろんだが、会場に古城公園を選んだこともデザイナーの一つだったと言う。



当初一回で終わる予定だった夢幻譚は、昨年で十回目を迎えた。単なるイベントに終始せず、若者たちを巻き込みながら、地域について考える機会にもなっている。

第五回世界ポスタートリエンナーレトヤマ、ザグレブ8(イト)ほか、数多くのポスター展での入選歴を持つグラフィックデザイナーの橋本利久氏は、高岡工芸高校工芸科出身。最近の主な仕事では、富山市芸術文化ホール(オーバード・ホール)や富山国際会議場のシンボルマークがある。

学生時代には、美術部で出会った人々から多くの影響を受け、先輩たちの目的に向かっていく勢いやスケッチ合宿などの経験は、今も橋本氏の心に焼きついている。この時、自然の中で、色や形、匂いや音などを自らの五感で吸収してきたことが、今のデザイナーとしての仕事にも大きく影響しているはずという。

そんな自身の経験を振り返り、「学生時代には、できるだけ多くの体験があれば良い。社会の現場での実習体験なども含めて、いろんな経験が必要かもしれない」と橋本氏は言う。また、「デザインツールとしてのコンピュータ環境は急速な進展をみせ、



上)高岡野外音楽劇「越中万葉夢幻譚」(国土庁長官賞、サントリー地域文化賞を受賞)「万葉のふるさとづくり」を推進する高岡市の文化イベント。万葉の歌人・大伴家持が、越中の国守として赴任してから1,250年余りの間に起きた様々な出来事に巻き込まれながら、タイムトリップするという設定で展開する壮大な野外音楽歴史劇。

左)各学科優秀作品発表会

ここ数年ですいぶんと変化している。より実践的な教育環境を目指すのであれば避けては通れない問題だろう」と続ける。ただし、コンピュータはあくまでも道具であって、デザインをしていくわけではない。デザイナーのパーソナルな意識が表現を決定していくという。

「人生を変えた仲間との出会い」

「デザインと塗りの基礎をこれから学びたい」と、十三年前、高岡短期大学の漆工芸専攻へ入学したのは漆職人の守弘勝氏。実家の彫刻塗屋で鎌倉塗の修業を始めて六年目の春のことだった。ここで、クラフトに取り組み仲間たちと出会い、後に高岡クラフトコンペでは、高岡商工会議所会頭賞を受賞している。今では、問屋さんからの依頼だけでなく、クラフト商

卒業して十一年たつた今でも、同期の仲間とは深いつながりを持つ。最新作の「陶胎漆器(陶器に漆を塗った作品)で使う陶器も、仲間が焼いたものだ。「残念なこと、同期の中で漆器業界にいる人は一割程度なんです。若者が目的意識を持ってなろうとする職業ではないのでしょか」という守氏の言葉には、「我々業界の人間が、若者を引きつける魅力を作りだしてないのではないか」との自戒の意味が込められている。

「産業の未来を見つめた若い勢いづくり」

伝統工芸、特に漆職人の世界では、技術は自家独自のものとして、代々伝承されていくのが普通だ。そんな業界において武蔵川工房では、十一年前からコンスタントに若手スタッフを採用してきた。現在は、高岡工芸高校卒業生、高岡短期大学卒業生、青貝師としてのキ



守弘勝氏の「陶胎漆器(銘々皿)」

ヤリアを積んでいる。「できる限り、採用を続けていきたい」と武蔵川義則(青貝師)社長は語る。それは「時代」に新しい職人が生まれてこない、産業界が成り立っていないからだ。自分で築いた技術もあるだろう。しかし、結局は先人から受け継いだ技術。受け継いだものは、また後世に伝えるのは当然だという。

武蔵川工房では、絵柄のデザイン指導も行うがそれよりも技術の習得を重視している。「ただ、漆器には生活の中で使われるモノが多いですからね。実際に自分で使ってみたり、使われている様子を観察することも重要だと思います」と言う。これらを幅広く経験することによって、職人としても、もちろん、将来的に作家の道を進んだとしても、本当のモノづくりができるようになるのだ。

「芸術性と社会性、そして産業界がリンクするデザイン教育が必要」

タカタレムノスの企画担当として高岡短大の共同授業に協力した麻生謙氏は、高岡工芸高校デザイン科出身。東京の大手電機メーカーのプロダクトデザイナーを経て、タカタレムノスへUターン入社という経歴を持つ。

麻生氏は、学生たちとのやりとりを通して、「学生は現実社会から離れた世界にいる」ことに気づいたと語る。発想が自由だから、作品の幅が広く造形力も高い。量産やコストなどの制約に縛られていないので、考えもしないデザインやフォルムが非常に多かった。とも、「市場にはないモノ」があるといった点ではとて



高岡短大との共同授業で講評する麻生氏

も新鮮でしたが、実用性や使用環境設定などの、プロダクティブな考えを持った学生がもう少し必要になります。ただ、その辺は経験がかなり必要になります。今回は企業と学生の考え方の違いに気づいてさえもらえば十分でしょう(麻生氏)。続けて、「これは、短大に限ったことではなく、デザイン教育の現場では、芸術志向の強い学生が多いようです。今回の共同授業のように、芸術性や造形力だけでなく、社会や産業界との関わり的重要性を意識させるカリキュラムがもっと取り入れられてもいいのでは」と分析する。麻生氏が挙げるこれらの要素を、高岡に限らず、デザイン教育に、求められるものではないだろうか。



守弘勝氏の「高岡'98クラフトコンペ」高岡商工会議所会頭賞受賞作品「杉のころのSARA 朱と黒」

橋本利久氏の'97第5回世界ポスタートリエンナーレトヤマ入選作品「魚津埋没林博物館ポスター」

橋本利久氏がデザインしたオーバード・ホールのシンボルマーク(写真はパンフレット)

武蔵川義則氏の「高岡'98クラフトコンペ」入選作品「皿セット」



武蔵川工房の作業風景



麻生謙氏デザインの「タカタレムノス掛時計(ASTEROID)」



麻生謙氏デザインの「タカタレムノス掛時計(ASTEROID)」



馬像の原型づくり（高さ2.8m、全長2.6m、幅1.1m）の仕上げの様子。ここまでの段階で二カ月半ほどの日数が費やされている。完成までは「あと三カ月ほど」とか。粘土が硬くならないようにするため噴霧器で水をかけたり、ひと休みの時はビニールを巻いて乾燥を防いだりと、制作以外のところでも結構手がかかる。

技・ヒト—モノづくりの情景

【第三回／原型師】

アトリエの天窓から早春の柔らかな日差しが舞い込み、小鳥のさえずりが静寂を遮っている。秒針がその歩を忘れたかのように止まった一瞬、粘土がごぶし大にちぎられた。そして手の平で粘土を押しつけ、親指のつけ根の部分で粘土を塗り込み、指先で形を整えていく。この間、原型師・田淵吉信氏は口元をキツと結び、背を決したように制作途上の原型を凝視。その視線は、粘土の粒一つひとつの表情をも確認しているようだ。粘土で喜怒哀楽、力、そして生命を表すというのは、自分の中のそれを投影することにほかならない。だから粘土をつける瞬間は、エネルギーを注入する時と言いつ替えることもできよう。原型づくりには、命を創造するような崇高さが感じられる。

「釈迦の足跡を訪ねた」美大を卒業した田淵氏は、原型師になりたいという希望を持って二十年前に高岡に来た。そして、とある銅器製造会社に就職。当初から原型づくりに携わり、技術は「見よう見まねで身につけてきた」という。依頼される原型づくりの七割ほどが仏像であるが、原型師として仕事を始めて五年が経った時、田淵氏は壁にぶち当たった。仏像には如来、菩薩、明王、天部といくつもあり、伝播した国や時代によって様相が異なる。そして何より、仏像は拜む対象、慈悲や救いを求める対象である。拜む人が求めるものを、いかに表現するかに悩んだのであった。ちょうどその時、釈迦が歩いた道をたどる旅の企画が舞い込み、ひと月の休暇をとって渡印。「技術的に何か解決した」ということはないけれど、釈迦の足跡を訪ねて心が洗われるような気がした。ほく自身が救われたのかもしれない」と十五年前の記憶を手繰り寄せた。

「原型は心でつくる」二十一年間原型をつくらせて、「粘土は気力でつくるもの。原型は心でつくるもの」と田淵氏は実感し始めている。ひとつの原型をつくるには、三カ月、四カ月、大型のものになると半年や一年くらいはかかりつきりになるが、この間に粘土の塊は命を持ち、まるで人格もあるように見えてくるという。

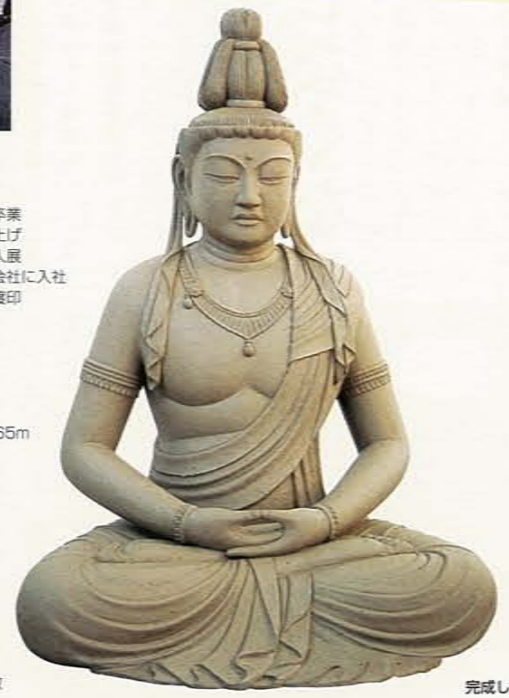
「原型師」仏像や銅像・胸像などの鋳物をつくる時、まず最初に元になる型を粘土等でつくる。その型づくりの職人のことを指して原型師という。原型をつくった後には、鋳型制作、鋳込み、型外し、彫金・着色などの工程がつづく。ちなみに、前号までに紹介した「彫金師」「塗師」「漆細工をする職人」は国語辞典に出てくるが、「原型師」の解説はない。また職業安定所の職業分類にも、この職種はない。



田淵吉信（たぶちよしのぶ）

- 1953年 岡山県生まれ
- 1976年 金沢美術工芸大学彫刻科卒業
卒業制作「無明」大学賞上げ
- 1978年 大阪「国道画廊」にて二人展
- 1979年 富山県高岡市の銅器製造会社に入社
- 1984年 仏教美術の源流を訪ねて渡印
- 1990年 独立・自営

- 主な作品
- 【銅像・立像】
- 名寄岩間立像（北海道）2m
- 中川一郎氏立像（北海道）2m
- 松野幸泰元国土庁長官立像（岐阜県）1.65m
- 高橋別当実盛座像（埼玉県）1.8m
- 麻名短立像（福井県）3.5m
- 舞楽聖母王像（広島県）2.4m
- 流調馬像（静岡県）2.9m ほか多数
- 【仏像・上人像】
- 如意輪観音立像（福井県）5.4m
- 金剛力士立像一対（北海道）2.4m
- 聖観音立像（北海道）3m
- 慈母観音立像（静岡県）1.5m
- 弘法大師立像（岡山県）6m
- 蓮如上人立像（大阪府）3.8m
- 白衣観音立像（広島県）8m ほか多数



完成した大日如来の原型



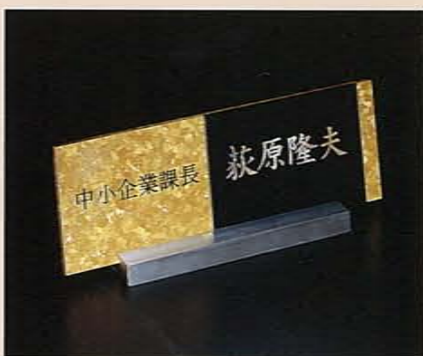
- 箸練り（写真上）
- 粘土には水粘土と油粘土がある。水粘土を使う場合は、まず粘土を練ることから開始。陶芸のように粘土の中の気泡を抜くほどの細かさは不要だが、粘土が硬ければ水分を与え全体が均一になるように練り上げる。
- ヘラ（写真下）
- ヘラは細かい模様をつけたり線を描いたりする時に用いる。木ヘラは使い勝手がいいように削り、五寸釘を曲げてオリジナルの金ペラをそろえることもある。しかし、一番の道具は、本人の指。特に親指、人差し指の細かな作業が、原型の命ともいえる表情づくりの鍵となる。

[98年度デザインの動向]



高岡漆器の意匠開発事業
**飲食シーンを彩る
 漆器の新しい提案**
 伝統工芸高岡漆器協同組合では「暮らしへの提案—漆器でアレンジ—」をテーマに、食のシーンを中心とした「意匠開発事業」に取り組んだ。
 器の商品は若手会員で組織する高岡漆器青年会に委託し、小鉢、酒器、ワインクーラーなど約二〇〇点を製作。手削りの味わいを残した木地や、縄を巻いて成形したものに漆を塗り重ねたものなど、若々しい感覚で伝統技法にチャレンジした。
 ランチオンマットのデザインは高岡市工芸デザイン指導所に依頼し、三五点を製作。楕円を変形したシンブルな形・色で、それぞれ六種類。加飾には高岡漆器の伝統技法（螺鈿・彫刻・蒔絵）が生かされ、和洋食器どちらにも合うパターンとなっている。季節やもてなし方に応じて、色と形が自由にコーディネートできるような提案された。
 いずれの商品も新鮮な感覚や発想が吹き込まれ、これからの飲食シーンを彩る予感に満ちている。新しい高岡漆器の商品誕生のチャンスになればと、関係者からの期待も大きい。これらの

高岡市商工労働部の管理職クラスデスクに、地場産業のアルミ、鋳物、漆器の青貝技術を複合した卓上ネームプレートが採用された。
 この商品開発は平成十年春、景気の低迷で需要が落ち込んでいる地場産業に一石を投じるため、高岡市が自ら提案し、各業界に製作依頼したものである。
 スタンド部分には腐食しにくいアルミ素材を、本体には特殊な製造で表面に光沢のある結晶を出したマル



**市役所にオリジナルネームプレートが登場
 アルミ・鋳物・漆器の素材と
 技術を使い、
 地場産業を活性化**

商品は、三月にクラフトショップ・フォルム二階の時空ギャラリーで発表された。今後は東京での展示会も検討中とのこと。
 伝統工芸高岡漆器協同組合 ☎0766-2210001

モブラスを使用。そしてネームプレート部分には、高岡漆器の伝統的な加色法・青貝技術で氏名を表現した。ネームプレートは取り外し可能で、人事異動などで職場が変わっても使い続けることができる。
 「これまで地場産業のアルミと鋳物、漆器が一つの商品に活かされることはあまりなかった。新しい複合素材としての活用が期待できそうだ」と開発を提案した同市中小企業課では、今後の業界の対応に期待を寄せている。高岡市では、この卓上ネームプレートを他の部署でも採用していくことを検討。地場の企業との連携を図りながら、新しい高岡ブランドとして全国に発信していきたいとしている。
 伝統工芸高岡漆器協同組合 ☎0766-2210001

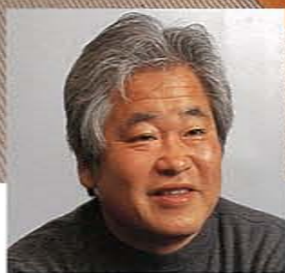
**地場産業素材を組み合わせた商品開発
 素材のコラボレーションで
 伝統工芸を生活の中に再生
 させる**

フロタクトデザイナーの黒川雅之氏デザインによる、全国の地場産業の素材を使った商品開発プロジェクト「ジャポニスム」が、竹中製作所デザイン室で進行している。
 このプロジェクトは、これまで全国の地場産業と関わってきた黒川氏が「かつて文化産業だった銅器や鉄器、漆器などの地場産業が斜陽を迎えている。生活から離れてしまった伝統工芸の素材を、デザイナーの力で日常

に戻したい」と、竹中製作所に提案したところによってスタートした。
 商品は直径十四〜二十四cm、高さ一〜五cmの円形の器。高岡の漆器とアルミ、若手の南部鉄器で構成されている。大きさや素材の異なる器を自由にスタッキングし、食器や灰皿、水盤など様々な用途に使える器になっている。
 デザインは極めてシンプル。素材感を活かしつつ、海外から見ても日本的であるもの、また海外の生活空間にもフィットするものを目指した。価格は素材によって変動するが、生活用品としてできるだけ安く提供していく考えだ。
 現在、試作モデルが完成し、量産に向けて最終調整の段階を迎えており、五月には発表。販路を開拓しながら年内の全国発売を目指している。
 竹中製作所 ☎0766-2210001



あるし、デザインという概念も無論同様である。しかし、工業化され量産される事を背景とした製品群は、有る意味では単純化される事の一つの宿命とされてきた。シンプルである事、そして分かりやすく美しいという概念である。この考え方は、混沌とした意識に明解なガイドラインを付け、飛躍的に広がった情報を効率良くネット化し集束化をはかる事には極めて有効であった。しかし、今、さらに開かれた地帯はさらに複雑である。
 新しい未知のカオスが開きつつある。我々の意識にとって汚かった物が美しく見え始め、アンバランスな物が均衡し、異質な物たちが統合されている。今まで少々美しかった物たちは力を失い、退屈し、エネルギーを感じない。私などは、自身の中にカオスを探さなくてはならないのである。
 (文/杉本貴志)



杉本 貴志 (すぎもと たかし)

インテリアデザイナー
 株式会社スーパーポテト代表取締役

1945年東京生まれ。88年東京芸術大学美術学部卒業。71年スーパーポテトデザイン室設立。73年株式会社スーパーポテト設立。88年株式会社スーパーブランディング設立。
 武蔵野美術大学教授、東京芸術大学講師、愛知県芸術大学講師、ギャラリー「間」運営委員、JCD(日本環境設計家協会)常任理事・副理事長。工芸都市高岡クラフトコンペ89審査員、97~98年審査委員長を務める。
 主な受賞: 84年、85年毎日デザイン賞受賞、85年インテリア設計協会賞受賞。

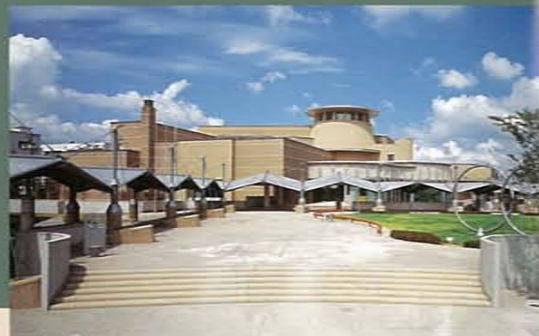
①スペインの皿 ②オブジェ 木・紙(若林 隆) ③オブジェ 照明装置(川上由里子) ④信楽の陶器 ⑤朝鮮の茶碗 ⑥インディアンの木鉢 ⑦木と鉄の箱 ⑧漆器(松崎 隆) ⑨オブジェ(小泉アヤ) ⑩照明スタンド ALA ⑪照明スタンド TIZIO
 スーパーポテト(東京・上北沢)にて撮影

いままで少々美しかった物が力を失い、エネルギーを感じなくなる。

M Y
 S E L E C T
 G O O D S
 3
 私のグッドなプロダクト



〈まちなみ景観部門〉最優秀賞 / アカシア並木通りの家並み



建設省の「公共建築百選」に選ばれた高岡市美術館



〈住宅部門〉優秀賞 / 末坂邸



〈住宅部門〉優秀賞 / 茶室のある家



〈建築物部門〉優秀賞 / 天野屋蒲鉾店



〈建築物部門〉優秀賞 / 立浪眼科病院



〈建築物部門〉優秀賞 / そば処こんや

平成十年度高岡市美観賞
点から線へ。景観の広がりが高く評価された七年目

今年度の高岡市美観賞は、表彰部門が住宅・建築物・建造物・まちなみ景観の四部門に細分化。各部門に合わせて五五件の応募・推薦があり、グラフィックデザイナーの松永真氏をはじめ七名が選考した。

最優秀賞は、まちなみ景観部門に応募のあった「アカシア並木通りの家並み」。住宅地を貫く四八〇mの道路に八六本のアカシアが植樹され、住宅

も生け垣、樹木植栽の義務づけによって緑化推進と保全がなされている。「開発側の素晴らしいコンセプトもさることながら、それらを十四年間育んできた一戸一戸の住民の環境に対する意識の高さ、協調、努力がこの景観を獲得した」と高く評価された。

優秀賞には住宅部門の「末坂邸」と「茶室のある家」、建築物部門の「天野屋蒲鉾店」、「立浪眼科病院」、「そば処こんや」の五件が選ばれた。門扉や看板、エントランスなどを対象とした建造物部門には、今回入賞に該当する

物件がなかった。

松永選考委員長は昨年の総評で「景観は点の連続としての線であり面である。その景観は、主体的かつ協調的な時間の累積によって結実するのではないかと述べた。今回最優秀賞を受賞したアカシア並木通りの家並みは、その成果が見事に体现されたものといえるだろう。」

〔高岡市都市整備部建築指導課〕0766-201429

建設省の「公共建築百選」
富山県からは高岡市美術館ほか二件の公共建築が選定される

平成十年十月十四日、建設省が発表した「公共建築百選」に、富山県内からは高岡市美術館ほか二件の公共建築物が選ばれた。全国で一〇〇件を選定する事業で、一つの県から三件が選ばれるというのは富山、石川など七県のみ。施設設置者はかりでなく建築関係者にも朗報をもたらした。

この事業は、建設省の設立五〇周年

を記念して行われたものである。昭和二十三年から平成七年までに完成し、現存する公共建築が対象。各都道府県から推薦された三件が審査の対象とされた。

評価の基準は、地域社会に対する貢献度が高く、地域住民に親しまれていること。建築技術、意匠等の観点で優れていること。施設の管理・運営・保全が良好に行われていること。の三点である。

富山県からは、高岡市美術館、立山博物館、利賀芸術公園が推薦され、三

件とも選定された。高岡市美術館は、平成六年九月にオープン。展示室に木材を使用して温かさを醸し出している。そして開館以来、国内外の大型展を誘致し、「高岡文化の森」の中核施設として市民に親しまれている。また立山博物館は平成三年のオープン以来、立山の歴史や文化を紹介し、利賀芸術公園は、舞台芸術のメッカとして発展している。

なお、百選に選定された公共建築は、近く作品集にまとめられて出版される予定というから楽しみだ。

「恋文展」
文化財とアートの競演

国の登録有形文化財・榎田家（高岡市伏木）は、威厳ある数寄屋建築や古美術品などの所蔵品が、明治の回船問屋としての面影を今に伝えている。この日本情緒あふれる空間で、高岡市をはじめ富山県内で活躍するグラフィックデザイナー八名によるアート・クラフト展が開催された。「自分たちの胸の内をカタチに込めて、誰かに届けたい」という意図で企画されたもので、テーマは「恋文展」。タペス

トリーや照明器具、パネルなど素材や表現方法にとらわれないユニークな作品が、作者の感性や熱意を映しながら、伝統的な建築様式に溶け込み独特の芸術空間を演出した。

榎田家は、建物の一部を公開しているが、作品発表の場として提供するのは異例のケースである。榎田家では「若いデザイナーたちの考え方に共感して協力した。企画の内容次第では、今後もギャラリーとして提供することを検討したい」と話している。

〔榎田家〕0766-440147



伏木北前船資料館（右の屋根にあるのが望楼）

高岡市伏木北前船資料館が開館
明治時代の回船問屋を修復、貴重な文化財として一般に公開

高岡市伏木古国府にある回船問屋・旧秋元家住宅を利用した伏木北前船資料館が、平成十年十月にオープンした。



展示室

秋元家は、江戸時代後期から明治時代にかけて海運業を営んでいた旧家。現存する建物は、明治二十年の大火の後、焼失以前の建物を復元するかたちで新築されたと伝えられている。資料館は平成八年、高岡市が秋元家を購入し、貴重な文化財の保存と一般公開を目的に修復、整備したもの。平成十年七月には市の文化財に指定された。

建物は、約二〇八坪の広い敷地に母屋と土蔵三棟が点在。土蔵の上に



高岡からも金属や漆器などのクラフト作品を出品

とやまのクラフト展in静岡。素材との出会い

平成十一年三月九日から二週間にわたり、静岡県デザインセンターにおいて、富山県のクラフト作品を一堂に集めた展覧会「とやまのクラフト展in静岡―素材との出会い―」が開催

は、港の船の出入りを監視するため設けられた「望楼」があるなど、回船問屋家屋の特徴が色濃く残されている。主な展示品は、北前船の模型や交易資料、遠眼鏡、和磁石のほか、当時のチラシ広告の引き札や、安全折願の船給馬など。海運業で栄えていた頃の伏木の面影を偲ぶことができる。

開館は午前九時から四時三十分まで。観覧料は一般二〇〇円、小中学生一〇〇円。火曜休館。

〔伏木北前船資料館〕0766-443999



静岡デザインセンターでは毎年、日本各地のクラフト作品などを紹介する展覧会を開催して交流を図っており、今回はクラフトデザインにおいて県外からも高く評価されている富山に要請があり、展覧会開催の運びとなった。

会場となった展示ホールには、金属・漆器・木工・ガラス・陶器・テキスタイル・和紙など、多岐にわたる作品およそ二五〇点が展示された。高岡市からは金属・漆器などの作品一〇点余りと、高岡伝統産業青年会から「くらしに生きる伝統のかほり展」昨年十月に開催での作品も出品。さらに、「デザインウエーブ98in富山」における県内作家のワークショップのガラス作品も紹介されるなど、層の厚い展覧会となった。

オープニングの前日には、交流会が催され富山、静岡両県のクラフト作家や関係者らが親睦を深めた。

〔とやまのクラフト展in静岡実行委員会（事務局）〕富山県デザイン協会 0766-264701

高岡オフィスパークの中枢を担う「富山県産業高度化センター」「富山県総合デザインセンター（仮称）」「高岡デザイン・エッセンスセンター（仮称）」三施設共通の愛称とシンボルマークが決定した。富山県デザイン協会のグラフィック会員を対象に募集されたもので、愛称は富山市の吉野光男さんによる「サン・センター（S.S. Center）」。

地域のデザイン産業をエネルギーギッシュに照らすSSC（太陽）となることを願い、三センターをカタカナで表記している。シンボルマークは、富山市の彼谷雅光さんの作品。脳細胞をモチーフにしたマークは、各センターが多角的に結びつきながら知識や技術を獲得し、新しい創造を行う様子を表現している。また、各施設のイメージカラーも同時に設定された。シンボルマークは、施設PRのためにパンフレットや名刺など幅広く活用される。

〔富山県商工労働部商工企画課〕0764-443243



シンボルマーク



写真左/暮らしのデザイン開発とワークショップ
写真下/クラフトデザインフォーラム

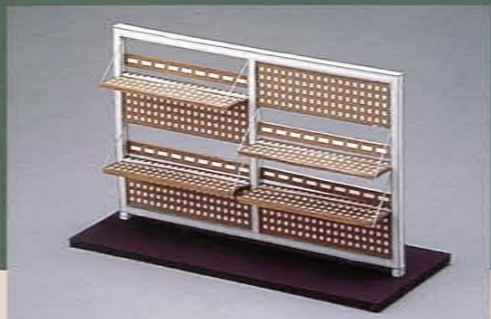


十月十五日、県工業技術センターで開催された「暮らしのデザイン開発とワークショップ」には、建築やプロダクト、グラフィックなど幅広いジャンルで活躍する地元デザイナーが参加。約一カ月間、

富山の暮らしとデザインフォーラム ユニバーサルデザインや福祉社会を 様々な視点から捉える

二十一世紀の生活環境と福祉社会を見据えた「富山の暮らしとデザインフォーラム」(主催/高岡市・富山市・富山県デザイン協会ほか)が、平成十年十月十三日から二十八日、富山県工業技術センターや高岡短期大学などで開催された。

「地域の活性化とパブリックアート」をメインテーマとした、「第五回全国パブリックアート・フォーラム(高岡)」(主催/第五回全国パブリックアート・フォーラム高岡開催委員会、共催/高岡市、井波町、高岡商工会議所ほか)が平成十年十月二日・三日、高岡商工会議所を主会場として開催された。初日はまず、「パブリックアート・レビュー」誌発行人であるジャック・ベッカー氏(米国)が「文化革命として



〈デザイン大賞〉ガーデンライフを演出するフェンス/村田健司



〈デザイン優秀賞〉ガーデニング用水差しポット/蒲生孝志
〈デザイン優秀賞〉シャワー椅子/江崎哲

新しい地元ブランドを 生み出すためのコンペ

「商品化」を目的とした富山プロダクトデザインコンペティション(主催/デザイン工房開催委員会)の最終審査会が、平成十年十一月十一日に行われた。

十三回目を迎えたクラフトコンペは、二五九三点という過去最高の出品数を集めた。入選作品も、これまで最高点数だった前回を上回る九〇四点。回を重ねるごとに成長を遂げながら、質量ともに日本を代表するクラフトコンペとして定着したといえよう。グランプリに輝いたのは、高岡短期大学出身で現在は富山県八尾町で工房を構える下尾和彦さん(十三頁参照)。また、入賞者十一名のうち、三名は高

過去最大の規模に成長 工芸都市高岡38クラフトコンペ

岡市の作家である。これについて関係者は「コンペ全体のレベルも上がっているが、それ以上に高岡の作家が頑張っている。クラフトコンペによる成果のひとつだ」と話している。

コンペとしての規模、内容が充実する一方で、地元産業への波及効果については現在も模索中だ。今回



五回目となる今回は、県内企業から提出されたガーデニング用水差しポット、シャワー椅子、ガーデンライフを演出するフェンスの三課題に二一六点がエントリー。最終審査は協賛企業や出品者、デザイン関係者に内容を公開する形式で進められた。会場では五名の審査員が一次審査で決定した入賞作品九点からデザイン優秀賞三点を選出。その中からデザイン大賞を選んだ。

約二時間におよぶ審査では、デザインだけでなく、商品化の可能性や生産コスト、マーケットサイズなどについても議論。最終的には立山アルミニウム工業が課題提出したガーデンライフを演出するフェンスに応募した村田健司氏の作品がデザイン大賞に輝いた。

今回は三課題ともエゴロジィ・高齢化・福祉という時代の要請に関わっており、応募作品にもこうしたものへの

のクラフト展では、実験的に銅器や漆器など高岡の製品を展示販売する「クラフト市」を、会場(高岡・東京)の一角で開催。完売が続出するなど予想以上の反響となった。将来的には、単独開催を目指していくという。また、前回から実施しているアンケート調査も継続された。クラフト展やクラフト市の売れ筋とアンケートの結果を分析すれば商品開発のヒントになる。何らかのカタチで地元産業にフィードバックしたいと関係者は話した。

(高岡商工会議所内クラフトコンペ事務局
0766235000)

協賛企業にデザイン力を アピール

平成十年十一月十九日から四日間にわたり、富山県高岡文化ホールにおいて富山県デザイン展が開催された。集まった作品は、自由・課題の両部門に合わせて五五七点。課題部門

配慮が感じられた。またフォルムの主張より、生活者の視点で捉えたデザインが多かったのも特徴といえるだろう。

同コンペではこれまで四作品が商品化されているが、今春には前年度デザイン優秀賞を受賞した家庭用精米機がマルマス機械から発売される予定だ。

(デザイン工房開催委員会事務局 富山
インダストリアルデザインセンター内07
60265006)



パネルトーク

高岡漆器(ニラ)の魅力を 学校給食に 漆器のトレーを導入

高岡市では、地場産業の振興と伝統工芸に対する児童の関心を高めることを目的として、モデル校となる市内の小学校二校に高岡漆器の給食トレーを初めて取り入れた。導入にあたっては、学校給食ですでに漆器のお椀を使用している輪島市を視察するなど、産地振興の行政施策や導入方法などの調査を進め、最終的にトレーに絞った。



製作は伝統工芸高岡漆器協同組合に依頼して、反りにくく、水切りの良



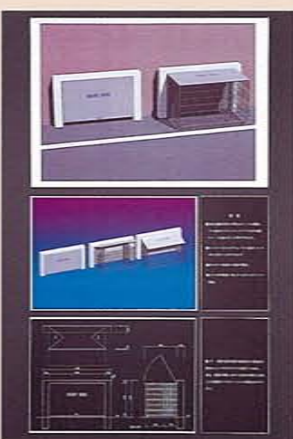
2220097
高岡漆器協同組合
07666
4508、伝統工芸
0766201
高岡市教育委員会体育保健課
ある。

ながら、パブリックアートは「芸術作品を公共の場で一般の人々に鑑賞してもらおう」という環境の質的向上をはかる段階から、社会に貢献する時代に入った(杉村氏)ことを確認していた。

二日目は全国各地から集まった専門家によって、アートを生かした地域づくり、パブリックアートの保守管理、パブリックアートと教育現場などの視点で分科会が行われたが、全体をとおして芸術作品や生活環境のデザインが今後、地域の活性化にどうかかわるかという問題提起がなされたようだ。

(高岡パブリックアートフォーラム事務局
07664076008)

同組合の天野理事長は「トレーが樹脂製から漆器に変わっただけではなく、これを機会に子供たちが伝統工芸を身近に感じたりモノを大切にすることを養ってもらえればうれしい」と話す。高岡市では、モデル校での様子を見ながら他の小学校にも段階的に導入する方針である。



写真上/〈(財)富山県産業創造センター賞〉シンボルマーク/伊藤久恵
写真左/〈(株)松村精型賞〉スペースデザイン「ゴミステーション」/相川繁隆

のうちの二つの課題が高岡市に拠点を置く企業・団体から提供された。そのひとつが、高岡テクノドームの愛称で親しまれている富山県産業創造センターのシンボルマークである。六九点の中から課題賞に選ばれたのは、グラフィックデザイナー・伊藤久恵さん(富山市)の作品。同センターにはこれまでシンボルマークがなかったことから、正式採用することを決めた。

また、高岡市の松村精型が課題を提供したスペースデザイン「ゴミステーション」では、プロダクトデザイナー・相川繁隆さん(高岡市)が課題賞を受賞。審査員から「現在かかっているゴミ問題の諸点が解決できる実用性の高い提案である」と評価された。

(財)富山県デザイン協会0766264701



わたしと

高岡

高岡98クラフトコンペグランプリ受賞者
③ 下尾 和彦 (家具作家)

クラフトコンペ

「おわら風の盆で全国的に知られる富山県八尾町。眼下にのどかな田園風景が広がる丘の上に、下尾和彦さんの主宰する家具工房「シモンズ」がある。工房内に足を踏み入ると壁には鉋、鑿、鋸などの道具類、その奥には数台の工作機械が並んでいた。手づくりの注文家具といっても、機械は最大限に利用する、どれだけ機械をうまく使えるかで家具屋の力量が決まるというのが下尾さんの持論である。

シモンズのスタッフは、下尾さんと奥様のさおりさんの二人。取引先の材木屋さんが経営する工務店や、友人、知人などを介した顧客からの注文製作を中心に、以前勤めていた高山の家具工房からも製作の依頼が来たりする。

「好きで始めたとはいえ、家具づくりは仕事ですから、やっぱり売れる家具をつくりたいですね。そのためには



使いやすい、そして、どんな住まいにも合うシンプルさが重要だと思います。

それに、価格のことを考えると、作業効率も重要ですね。手間をかければ、いいモノができるかといったら、それは違うと思うんです。手仕事の良さを生かしながら、いかに機械をうまく使ってコストを抑えるか、これが常に私の課題でもあります」

仕事には予算がついてまわる。しかも、お客様の意向もある。自分が好きなデザインではなく、売れる家具という観点からのデザインを心がけなくてはならない。やりたいだけ時間をかけて好きなモノをつくるアートとは、そこが違うところなのだ。

とはいえ、さまざまな人が自分の家具を目にし、使う。自分が生み出した家具で、暮らし方も左右するかもしれない。それが家具づくりの醍醐味である。

手間をかければ、いいモノができるかといったら、それは違う。



高岡98クラフトコンペグランプリ「うもれぎ」

「時々、友人たちに私の家具の使い心地を尋ねるんですが、これがまた新しい発見の連続で、面白いんですよ。たとえば、私たちの結婚式の時に作った引き出物の御膳。これなんて、お箸とセットで贈ったのに、お茶を運んだり花器を飾ったり、皆、使い方を工夫して自分流に楽しんでるんですね。実は、そんな友人たちの暮らしぶり、が、今回の受賞作のヒントにもなっています。住まいや暮らしに合わせて自由に組み合わせる家具、というのにもイケルんじゃないかって。残念ながらクラフト展での売れ行きは、いま一つで



高岡98クラフトコンペ入選「a Sheet」

したけど。でもそうやって少しでも使ってみたいな、と思ってもらえるモノができた嬉しいですね」
変なこだわりは持たない。頭を柔らかくして、いろんな人の声を聞いて、いろんな世界を見て、いろんなことに挑戦していきたい、と語る下尾さんの次なる挑戦は、個展を開くことだ。
「写真だけを見て家具を買う人は、いないんです。見て、触ってもらわないことには、なかなか難しい。だから、なるべく早く個展を開きたいですね。もちろん、公募展への挑戦も続けていくつもりです。でも、ターゲットは、クラフトコンペのように、一品ものではなく量産品、アートではなく暮らしの中で使われるクラフトを求めた公募展に絞ります。自分と趣旨の異なる公募展での評価を聞いても、あまり参考になりませんからね」



木造平屋建ての工房、その一角に下尾さんの住まいがある。インテリアに開ける職業だけあって、決して広くはない部屋にご自身の手づくり家具を上手にレイアウトしている。テーブルの上には、裏山で拾った木の実や小枝がさりげなく飾られ、部屋づくりにもセンスが感じられる。いらなくない

下尾 和彦 しもかずひこ
家具作家

1972年 兵庫県芦屋市生まれ
1978年 富山県高岡市へ移住
1990年 高岡工業高校工業科卒業
1992年 高岡短期大学産業工芸学科木材工芸専攻卒業
岐阜県、木匠中西入社
1997年 家具工房「シモンズ」設立
1998年 高岡クラフト展グランプリ

木彫りの人形が飾られていた。「これも手づくりですか」と尋ねると、彼は少し照れたような顔をして、「似たモノが雑貨屋にあったんです。面白いなあって思ったけど、顔が気に入らなかつたので、自分でつくっちゃいました。で、その一つがある友人にあげたら他の友人たちも欲しがって。結局二〇体ほどつくって、プレゼントしたんです。仕事も、こんなうまいくくと嬉しいんですが(笑)」

下尾さんが「シモンズ」をオープンして一年あまり。注文製作の仕事に、新しく自分自身の作品づくりも加わり、大忙しの日々を送っている。私生活で



下尾さん手づくりの自宅リビング

も下尾さんは忙しい。今春、新しい家族が一人増える。生まれてくる赤ちゃんのために、お風呂づくりを始めたところだ。もちろん、大好きな手づくりで...

平成11年
9月2日

新クラフト産業の拠点、 いよいよオープン。

伝統工芸品の産地として、

またクラフトコンペの開催地として知られる高岡に、新しいデザイン・工芸の拠点が誕生する。

高岡市が整備を進めている

「高岡デザイン・工芸センター(仮称)」である。

同センターは、「富山県産業高度化センター」

高岡オフィスパーク(高岡市戸出)の

中核施設「サン・センター」を構成。

相互に連携を図りながら、

富山県のデザイン・情報産業を

トータルに支援していく。

中核施設
「サン・センター」

富山県産業高度化センター

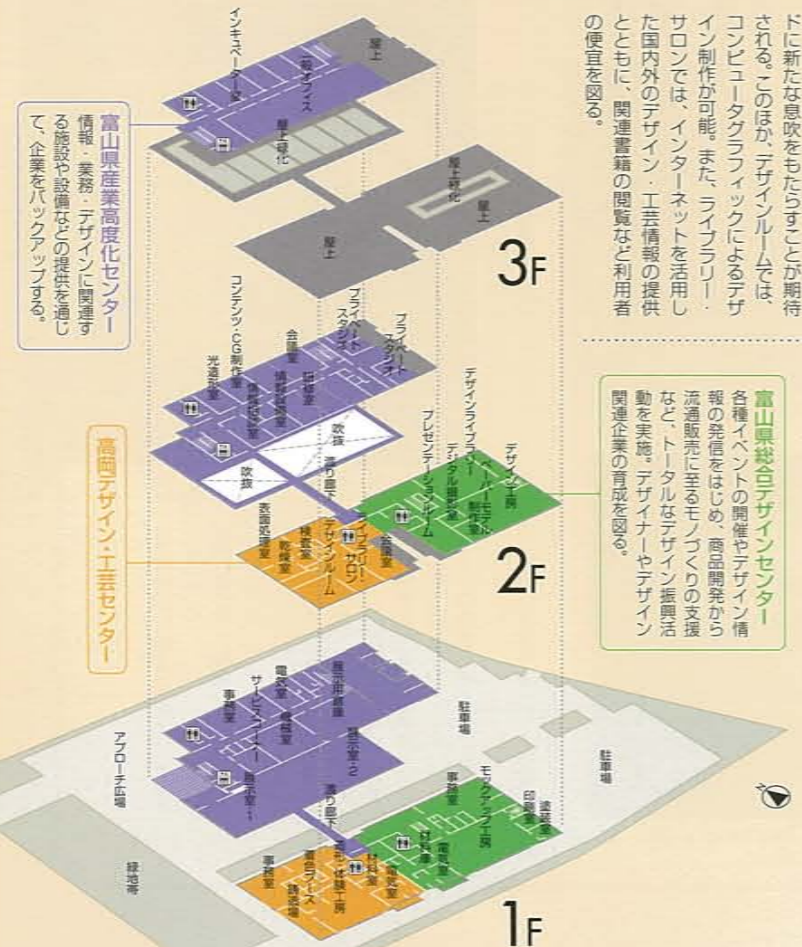


富山県総合デザインセンター

高岡デザイン・工芸センター

伝統工芸と新クラフトの融合
高岡デザイン・工芸センターは、「新クラフト産業・デザイン育成」(伝統工芸の保存・継承・デザイン・工芸の啓発・普及)を活動の二本柱としている。銅器や漆器など高岡の伝統工芸を継承しながら、新しいクラフト製品の開発やクラフト産業の確立を目指すべく、伝統工芸に従事する技術者の支援・育成はもとより、新技術や新素材の研究・開発など、幅広い視点でデザイン・工芸の振興を図る方針だ。

市民と工芸の交流
施設内には、金属溶解炉を備えた鋳造場や着色プロセスをもち金工の造形工房、さらに漆乾燥装置を備えた塗装表面処理室などを配備。デザイン作成から試作品の完成まで、買いたた作業工程に対応する実験工房として、伝統工芸の従事者やデザイナー、クラフトマンなどに提供される。また、体験工房としても広く一般の人々に開放。地元の工芸技能者を指導員に招き、本格的な金工・漆工のカリキュラムを編成する予定だ。これまでモノづくりの現場と一般の人々の接点が少ない高岡に「市民と工芸の交流の場」が誕生すること、デザイン・工芸のフィール



素材&技術

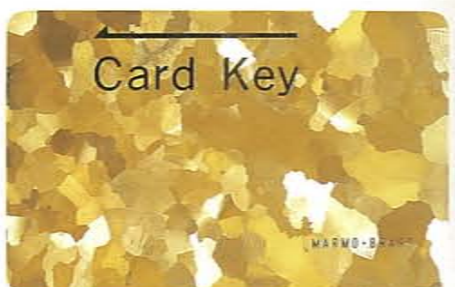
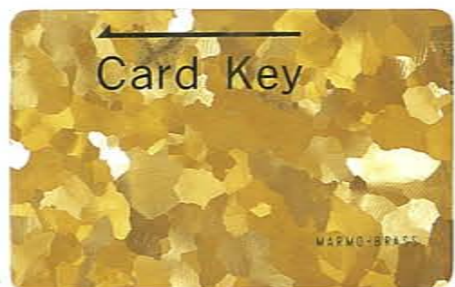
モノづくりの町・高岡を下から支えているのが、新しい素材や技術の開発。起業家精神に満ちあふれた技術者たちが日夜研究にいそしみ、新素材・新技術を生むべく努力している。開発に成功し商品化に至れば、いずれは本誌「メイド・イン・高岡 セレクション」のコーナーで紹介することになるだろうが、ここではその基礎となる新しい素材や技術の開発動向をレポートする。

金属結晶の技術を生かした、セキユリティシステム開発

高岡銅器の技術を生かして、今、新しいタイプの識別システムが生まれようとしている。これを応用すれば、偽造などが不可能なセキユリティシステムの確立も可能で、大手電機メーカーなども注目。具体的なシステム化については試作中であるが、高岡銅器の技術が世界の松舞台に躍り出るような快挙といえよう。

その識別システムとは、マルモブラスを応用した鍵（キー）の開発である。マルモブラスは、銅合金における表面処理技術のひとつ。個々の金属結晶を粗大化し、金属表面に結晶模様を析出させて温かみや光沢のある素材のように見せ、明るい色彩で表面着色したものである。美観が高く、従来はこの技術を花瓶や仏具、ネームプレートなどに使っていた。

金属結晶の模様は偶然にでき、同一のものは二枚とつれない。複製不可能なこの模様をセキユリティシステムに応用できないかと考えたのが、地元高岡の企業である。



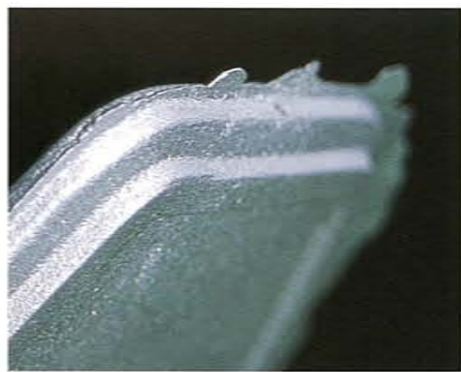
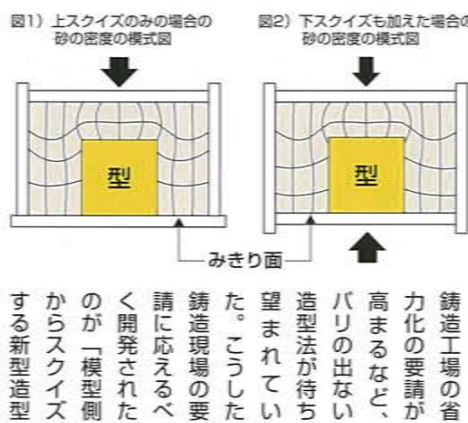
セキユリティショーに出展したカードキー。同じ結晶模様でも、光の当て方によって反射具合が異なる。これが識別の鍵となる。（左右の写真は同一のカードキーで、光の当て方を変えて撮影したものです）

三年前、開発を試みた企業は富山県工業技術センターの協力を得て、マルモブラスをカードキー化したセキユリティシステムを試作。幕張メッセで開催されたセキユリティショーに出展し、磁気カード方式のセキユリティシステムが大半を占める中で注目を集めた。

複製不可能なセキユリティシステムを求めてすでにアメリカでは網膜識別方法、指紋識別方法などのセキユリティシステムが

バリの出ない新造型法が中小企業長官賞に

鋳物の鋳造工程において、古くから課題のひとつとされてきたのが鋳型合わせ面（エッジ部分）のバリの発生である。バリがある製品としての出荷は不可能であるため、おもに手作業でこれを除去。しかしながら産業製品のハイテク化に伴い、鋳造品に対しては高精度化・高品質化が要求されるとともに、



従来のスキイズ法による製品（上）と新造型法による製品（右）。上下のダブルスキイズにするとバリが出ない。

鋳造には砂入れ、スキイズ（砂を押さえながら、離型、枠合わせ、注湯、解枠などの工程がある。スキイズが不十分で砂の密度が低いと、みきり面にすき間ができ、そこに注湯された金属が入り込んで鋳造品のエッジ部分にバリが発生していた。図1が、従来の鋳造法からスキイズした場合の砂の密度の模式図である。みきり面に近いほうでは圧力がかかり方が不十分で、砂の密

度が低いのは一目瞭然。これに対して下側からも圧力を加えるとみきり面側の砂の密度が高くなり（図2）、寸法精度が高まる上にみきり面にすき間もできず、バリの発生がなくなるというものである。

この新造型法は高岡地域地産産業センターの支援を受けた金森新東によって開発された。砂入れ、スキイズ、離型をひとつのシステムとして全自動ラインを導入できるほか、既存の鋳造工程を改良するべく単体機の導入も可。これで長年の課題がひとつ解決されたわけである。このシステムは、



主型づくりの指導をする育成者の西川氏

Information from 高岡市工芸デザイン指導所

伝統的工芸品 技術・技法継承者育成事業
高岡銅器、漆器の貴重な伝統的工芸品技術の消滅を防ぐために、高岡市はマンツーマン方式による人材育成制度を実施。



厚員の貼り込みを指導する北村昭彦氏

伝統工芸産業の後継者育成 技術伝承講座

伝統工芸の技術を次世代に残し、かつ新たな技法を興して伝統の礎を築こうと高岡市工芸デザイン指導所では各種の事業を展開している。ここでは、その代表的なものを紹介しよう。

の向上に結びつけようとするものである。平成十年度は、奈良の北村昭彦氏（選定保存技術保持者）を講師に迎え、漆工「螺鈿・厚貝」の講座を、九月二日・五日の三日間、工芸デザイン指導所実習室を会場として実施した。漆器産業従事者十二名が受講し、厚貝の切り方や切った貝を手板に貼り込む方法、埋め込む方法などを習得。受講生は下地や塗り工程を考えたが、厚貝の深みのある美しさを引き出すよう丁寧に細かな作業に挑戦した。また九月四日には講演「漆芸文化財の修理と復元模造」が催され、高岡短期大学漆工専攻科生や高岡市の伝統工芸産業技術者養成スクール修了生、産業界などからも多数が聴講し、螺鈿の歴史や正倉院の漆芸文化財の調査研究などについて熱心に耳を傾けた。

一定の資格を持つ育成者と継承者の双方に補助金を交付し、伝統的な技術・技法の継承に取り組んでいる。育成者は、高岡市伝統工芸産業技術保持者や伝統工芸士、継承者は市が開講する伝統工芸産業技術者養成スクール修了生をはじめ、高岡短期大学産業工芸学科や美術系大学の関連学科の卒業生で、継承する技術を生業とする意思のある者を対象としている。継承者の応募は随時受け付け、審査委員会が審査選考し、市が決定。補助金は育成者に月五万円、継承者に同三万円を一年間、さらに材料購入費として年十万円を支給する。

平成十年度、銅器（双型）の部門でこの育成事業を活用し、育成者として指導的立場に立った藤老子製作所の西川實氏は、「早く技術を覚えて一人前になって欲しい」と、若い人に新しい伝統の芽をつくってもらいたかったから指導に熱が入った」という。また継承者である同社の岩淵雅美さん（二十五歳、高岡短期大学出身）は、「学生の時、学んだことにさらに磨きをかけていくという点については、マンツーマンで指導していただくのって、身につきますね」と一年間を振り返る。

ちなみに、この育成事業は平成八年度より始め、既に五組が修了している。また平成十一年度は、補助対象者一組が漆器部門（木地／指物）に決定し、四月からスタートの予定。すでに修了した人も含め、継承者たちのステップアップを期待したい。

平成八・九年度
二組 銅器（彫金）、漆器（青貝）
平成十年度
三組 銅器（双型）、漆器（彫刻塗）（無地塗）

